

A photograph of a garden scene. In the foreground, there are several orange plastic crates filled with plants. The plants have large, heart-shaped leaves in shades of green, yellow, and reddish-brown. Some plants have pink ribbons tied around their stems. In the background, a person wearing a white shirt and dark pants is visible, standing near a wooden fence. The ground is dark and appears to be soil or mulch. The sky is blue with some clouds.

会報

たんばうるし

— 会報第 2 5 号 —

新年号

2025.1.10

2025年もよろしくお願いいたします

毎年秋恒例のイベント漆苗植樹祭「うえるかむまつり2024」を開催することができました。今年も学生プロジェクト参加の学生の皆さまに記録や写真撮影でご協力していただきました。今回はその記録や写真をたくさん盛り込んだ、うえるかむまつり報告を中心とした新年号とさせていただきます。

昨年12月前半から雪が降り、寒さの厳しいシーズンとなりましたが、今年も活動を進めていきたいと思います。

本年もどうぞよろしくお願いいたします。

学生×地域つながるプロジェクト

京都府学生×地域つながる未来プロジェクトは、大学生の地域活動への参画を通じて、地域団体（NPO等）と大学生の交流・協働の促進や地域の新たな担い手を育成する事業で、NPO法人丹波漆と学生のオンライン交流と学生による丹波漆のSNS・HP発信や、発信企画「丹波漆を考えるアイデアブック」の作成、うえるかむまつり2022でのワークショップ、半野生ウルシ調査など、毎年様々な協力をいただいています。今年は昨年度以前から引き続いて参加してくださった方と新規の方の混合チームで、これまでに2回の現地活動を行い、漆掻き見学や苗畑管理作業、広報ツールの検討などに取り組んでいただいています。



漆掻き見学



苗畑管理作業



広報ツールの検

うえるかむまつり 事前準備 と 当日運営

学生プロジェクトの皆さんには、うえるかむまつりの事前準備や当日運営のスタッフとして活躍していただきました。パネルや模型作品の展示は少し時間がかかりましたが、手分けして順調に進めていただくことができました。



展示パネルの準備



どれがどれやら



ドローン テスト中



当日は受付も担当



寄せ書き旗のタイトル記入



上夜久野周辺の漆関連マップも配布しました

イベント報告：うえるかむまつり 2024

菰田伶菜（京都工芸繊維大学） 保志岩柚葉（福知山公立大学）

石橋希実（同志社大学） 田中莉乃（京都女子大学）

監修 二社谷悠太（京都大学大学院）

1. イベント概要

NPO 法人丹波漆による毎年恒例の漆植栽イベント「うえるかむまつり」は、コロナ前と同様の規模での開催となった。午前の部では、「学生と丹波漆の未来を考える」と題し、ウルシに関する研究発表や展示を開催した。午後の部では「漆の植樹祭」が行われ、参加者はウルシの植栽と名付けを楽しんだ。

2. イベント詳細

午前の部：講演発表会「学生と丹波漆の未来を考える」

日時：令和6年11月10日（日）9:50～12:30

場所：京都府福知山市夜久野町 夜久野ふれあいプラザ研修室

註：京都府令和6年度豊かな森の恵み創造事業（森の文化発信）

午後の部：漆の植樹祭

日時：令和6年11月10日（日）14:00～16:00

場所：京都府福知山市夜久野町 体験農園（植栽地）

主催：NPO 法人丹波漆

午前の部の内容

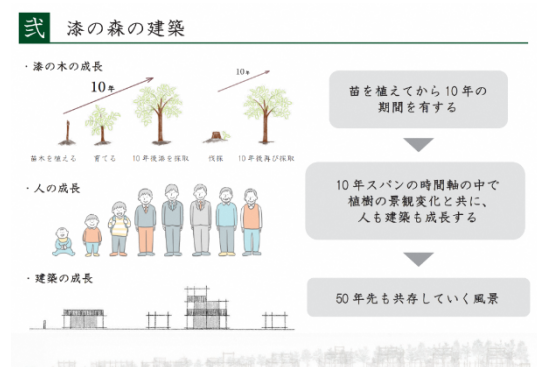
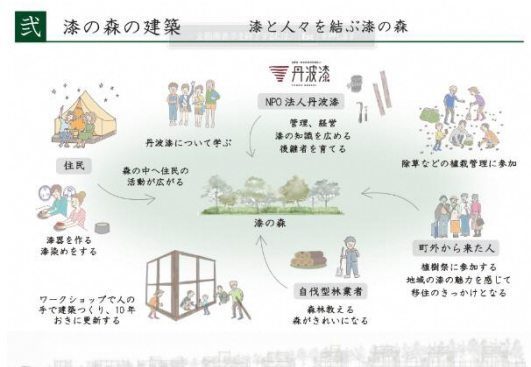
①発表「丹波漆伝承物語」

（発表：菰田伶菜氏・京都工芸繊維大学大学院建築学部専攻）

この作品は、丹波漆と人と建築が共に成長する作品である。丹波漆の課題点として、地域住民の認知度低下、漆の木の減少、後継者不足、鹿や台風による害、植栽管理者の不足の5点が挙げられ、それらを改善した50年後も継続していく風景を想定した施設を描いた作品だ。施設の特徴としては、漆が育ちやすい芝生の空き地を利用し、地域の人々が漆と共に成長していけるような施設を目指している。



模型作品の説明をする菰田氏



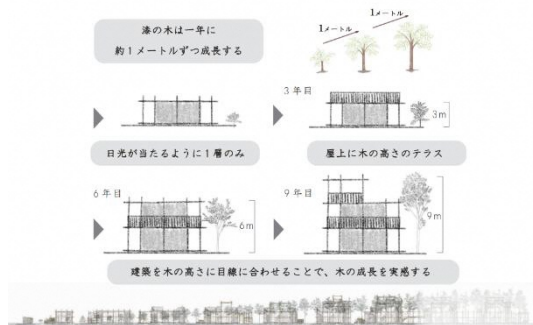
漆の森の中に建築を作り、木の組み方も、柱、貫、くさびの3点で簡単に作れるものになっており、地域の人と一緒に作ること、愛着が湧く施設になっている。

夜久野の漆掻きでは約10年でウルシの伐採が行われるため、それ以降は採取した漆を床材などに塗ることで施設自体を漆の作品として育てていく。

それだけでなく、切った木を用いることで、漆掻きをした傷という漆の特徴を引き出せる。また、漆は、水を弾く性質があるため、建築にも活かすことが可能である。こうして植栽地と建築が一体となった漆の施設を、新たな伝統として引き継いでいくコンセプトとなっている。

また、1～20年後を想定した部分模型と、50年後を想定した全体模型が展示された。10年後の風景は、漆掻きが生活に馴染み、成長に合わせて建築を組み上げるようなイメージで、25年後は、建築が漆化するイメージ、50年後は漆が人を豊かにし、人との繋がりで伝統を継続するイメージとのことだ。

伍 10年かけて成長する建築 二、漆と共に高くなる断面



陸 11年目以降の漆の森

三、変わりゆく活動の場



▶ 漆化した建築は50年先も受け継がれてゆき、枯渇した部分は10年おきに作り変えられて漆の森の伝統は受け継がれてゆく

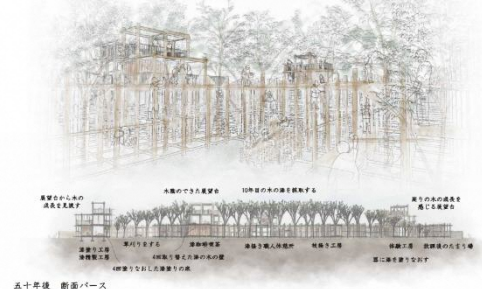
〈発表の感想〉

漆を採る身からすると、漆の中に地域の人々が入り、コミュニティをはかるという構造に目から鱗であった。いままでは、人々が入ってこない、効率的な方法で考えていた。(大藪泰氏)

森林科学の視点からみると、人が森林を管理するという環境はとても大切である。放置すると自然は良くない状況になるため、間伐など、ほどほどに人間が手を入れることは良いことだ。また、50年先まで見据えたビジョンもとても良く、持続可能性がある。(二社谷悠太氏)

五十年後の風景 継承される漆の伝統と建築

人の手で漆が育ち、人は漆の命をもらい、生活を豊かにする。建築は、漆の方で50年先も長く大切に守られ、丹波漆の伝統と共に人のつながりで継承し続けていく。



時系列で作成された模型作品を解説

〈参加者からの質問〉

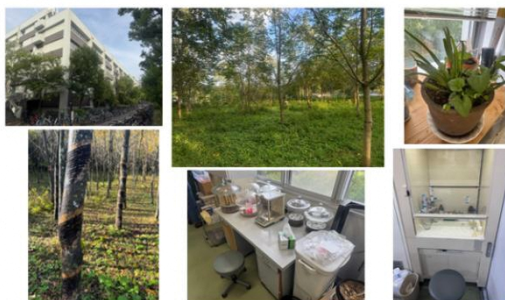
生活の一部のテーマパークとしての利用で、共住などはあるのか。
→共住などはなく、テーマパーク的な役割であると考えている。

耐火性、耐震性はどうか。

→その点については、今後の課題である。漆の素材がどれぐらい壁材として強いのかもまだ不明なため、スギやヒノキも使用予定である。この提案をもとにして、様々な観点から実証実験を行い、問題点の解消及びより良い改善点の模索が必要である。

ウルシと光合成と夜久野

京都大学農学研究科 森林科学専攻 二社谷悠太



②発表「ウルシと光合成と夜久野」

(発表：二社谷悠太氏・京都大学大学院農学研究科)

そもそも、漆とは、多くの種類の樹木がある中分類としては、落葉広葉樹にあたる。樹皮に傷を付けることで内樹皮の中にある樹脂道が断裂し、内部の漆液が滲出する。この漆液が精製の工程を経て、塗としての「漆」となる。傷をつけた瞬間は、乳白色で油のような手触りの液体であり、空気に触れると茶色になる。古くは縄文時代から、日本の伝統文化として受け継がれてきた素材である。

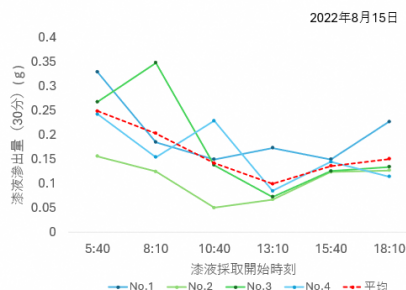
二社谷氏の研究を一言で表現すると「漆液の量を測る」ということだ。樹皮に穴を開け、脱脂綿を詰めて滲出する漆液を採取し重量を計測する。計測した漆液の量は日変動と季節変動という2つの視点で分析されている。日変動については早朝に最も多く昼過ぎに最も少ないというグラフが示された。これは漆掻きが早朝に行われるという事実を支持している。季節変動については、漆掻きの収量のピークがお盆の頃にあるのに対し、漆掻きを行わない木の滲出量ではピークが10月頃にあるという結果が示された。漆掻きの傷を付けるという行為によってピークが前倒しになるような現象の存在が示唆されていた。内樹皮に漆液が溜まるのだが、ここで、研究者

漆液の量をはかる

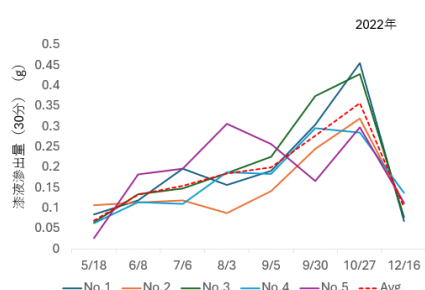
穴を開ける → 脱脂綿を詰める → 採取した漆液の重さを量る



漆液の量の変動を見る：日変動



漆液の量の変動を見る：季節変動



ドローン操作の実演をする二社谷氏

の心構えとして、「目に見えないものを見えるようにする」というのは大切な価値観だ。また、二社谷氏は森林調査におけるドローンの活用について言及した。自身もドローンを用いた調査に着手しており、ドローンの空撮画像からウルシの葉の色の解析を行い、植地毎に比較してウルシの健康状態を把握することができないか検証を行なっている。

次に二社谷氏は光合成の話題に触れた。漆液の主成分はウルシオールであり炭素を主体とした有機物である。この炭素は光合成によって空気中の二酸化炭素を吸収して植物体内の合成に使われる。光合成は地球上の生物を支える最も重要な現象であり、光合成を利用することとは植物を利用する農業や林業など人類の営みそのものである。

さらに現代の日本において、植物を利用する舞台こそが地方であると、二社谷氏は主張する。地方の未来を考えるにおいて、植物利用の視点が不可欠と述べた。

ビジョンを描くには、漆文化への興味関心こそが一番大事だ。このNPO 法人丹波漆も実際に移住者が多く、地元の方々は漆の存在は知りつつも、実際に携わる機会をほとんど持たないのが現状だ。そのため、夜久野の方々にこそ漆の魅力を知ってもらい、興味関心の場を広げるべきだ。

また、二社谷氏は週刊少年ジャンプで連載されていたDr.STONE（ドクターストーン）という漫画から漆に興味を持ったとのことだ。主人公が原始時代にタイムスリップして、科学の知識を活かして文明を再興する物語で、いくつかのシーンでウルシが登場し、研究テーマを探しているときに出会ったそうだ。

③鼎談「学生と丹波漆の未来を考える」

菰田伶菜氏・京都工芸繊維大学大学院建築学部専攻

二社谷悠太氏・京都大学大学院農学研究科

大藪泰氏・NPO 法人丹波漆

〈大藪氏から菰田氏への質問〉

・このような発想はどこからきたのか。

→NPO 法人の方と、植栽地の見学に行った際、森の中で、「森林ヨガやチェアリングをやってみたい。」と地域住民の方にご提案いただき、そこから着想した。



鼎談の様子



模型作品を見学する参加者

・他の木で似たような例はあるのか。

→ツリーハウスというものがあり、漆の森は事例がない。森の中に建築を作ることによって人と自然の共存を図り、漆を取り巻くコミュニティの活性化を見込む。

・現段階の目標はどのようなことか。

→修士の設計の際、住民の方々の声を聞きながら実現可能性に向けて研究したい。ワークショップを通して住民の方々に求められるような設計にしたい。

〈参加者からの感想〉

・漆はかぶれるもので、嫌われてきた植物であるのに、好かれるよう設計するのはすばらしい。

・漆の品質、他の産地との共立化も期待したい。

地方の強み = 植物

夜久野の魅力 = ウルシ等

夜久野の強みを活かし魅力を発揮するために最も重要なのは・・・

漆文化への興味関心

〈大藪氏から二社谷氏への質問〉

・4年前の研究から今日まで、どういう成果が出て、どのようなことが分かりつつあるのか。

→樹脂道の流れを顕微鏡で確かめている中で、1日の中でも、季節の中でも 変動が大きいことに気づき、そこから樹液の量を調べるようになった。最終目標としては、国内の漆が広まることや、量産のために、お手伝いをするすることで、漆産業へ貢献したい。どういう条件でウルシがたくさん取れるかなど研究したい。

・いままでの採取のやり方の見直しはあり得るのか。

→着目する点が多くあり、不透明ではあるが、伝統的にやってきた方法の妥当性の証明をしたい。良い点や科学的根拠を調べることで、より効率的になるように検討する。

〈参加者からの質問〉

・漆の森の計画を実現可能にしようと思うと、地元の人の理解が必要であると感じる。接触する機会を今後作る予定はあるか。
→市役所の方とお話したときに、その機会は設けられるとのことだった。今年度中までに、設けたいと考えている。



研究説明パネルや「Dr.STONE」も展示



参加者からの質問も様々

・ウルシは夏に取るものと聞いていたが、今は10月が多く取れるとのことで、研究者と実際に漆を採る人の整合性はどうか
→漆掻きで漆液が夏場に多く採取できるという事実自体は正しい
10月にピークが出ているのは、漆掻きを『していない』木。漆掻きをする木としない木で大きく差が出る事実から、ウルシという木の中で何が起きているのかを解明することが、ウルシ研究を進めるために重要。

・漆の個体差はあるのか。

→ある。夜久野のウルシはほぼクローンだが、植栽地によって個体差があり、何らかの理由によって個体差が出ていることが不思議である。

・「丹波漆1号」が一番漆がよく出ると聞くと、実際はどうか。

→夜久野のウルシのほとんどは、「丹波1号」と「新文化」。この二つを優良品種として分根によるクローンの増殖を行っているが、遺伝的に画一的な増殖は病気蔓延などのリスクもあり、多品種の導入及び分根ではなく実生苗の生産などで、遺伝的多様性の確保に着手している。

品種に関してはまだまだ不明であり、米のように品種そのものを明確にし、品種を成長させていくような研究も発展させていきたい。

〈最後に〉

福知山とプロジェクトを進め、修士論文に向けて夜久野と建築の融合可能性を検討していきたい。他の学生の反応としては、卒業設計が終わった後の講評で、お褒めの言葉をいただいたが、漆や夜久野について特別興味を持たれたりはしなかった。実際に来ていただくなどのアクションを起こすことが今後の課題である。(菰田氏)

周りの反応としては、漆の珍しさによって興味を持たれることが多い。他に似た樹脂が特にない点が興味深い点だと感じる。後輩から、漆を研究したいという声も聞く。漆の勉強を続けるだけでなく、発表をすることで発信をし、興味関心をもっていただき、漆文化を活性化させたい。(二社谷氏)

午後の部の内容

漆の植樹祭

山内耕祐氏・齊藤善之氏(NPO 法人丹波漆)による作業方法の説明ののち、参加者らは二人一組にて植栽作業を行った。
また参加者らは、植栽した木に名前を付けた。

写真をたくさん撮影してくださいましたので、今回の作業をご紹介します



今年は保育ブロックとポットレストレー苗の植樹



植え方の説明



目印のポール部分に、苗が入る大きさの穴を掘る



苗を植え、苗の周囲の土を踏む



草除けのためのマルチング作業



苗木に名前をつけました！

3. 参加学生の感想

・植栽作業の体験を通じて改めて貴重な体験ができていると実感しました。また、参加者の方々が漆に興味を持って楽しそうに作業を行う様子をみて、もっと多くの人に漆を知って欲しいという思いが強くなりました。

二社谷さんや菰田さんの発表では、漆を使った製品づくりという考えしか持っていなかった私にとって全く異なる視点で興味深いお話を聞くことが出来ました。これからもさまざまな視点から漆を知り、漆の魅力を引き出す方法を考えていきたいです。(保志岩柚葉)



初めてうえるかむまつりに参加して、いろいろな分野から漆の魅力を深く知るだけでなく、実際に植栽体験をすることで、漆にもっと関心を持ちました。菰田さんと二社谷さんの研究発表を聞き、漆文化の発展は、漆に興味関心を持っていただける方を増やすことが一番大切なことだと感じます。地域の人々の漆への認知度低下という重大な課題がありますが、いままでにない地域の人々と交流する場を作ることができたら、地域の人々にも漆の魅力が必ず伝わると思います。地域の人々と協力しながら、実現に繋がることを楽しみにしています！

また、私個人としても、丹波漆の活動の中で、1人でも多くの方に漆に関心を持ってもらうために、尽力していきたいと思います。(田中莉乃)



今回初めて参加させていただいたうえるかむ祭りでは、菰田さんと二社谷さんによる漆の研究発表や植栽体験を通して、漆に関する知識と親しみをより深めることが出来ました。特に印象に残ったことは菰田さんの研究内容です。

実は地元の方でも丹波漆の認知度が低下しているという現状から後世にも継承するために、人々と漆が身近に共存し、共に成長していくような「漆の森」の設計提案に驚嘆しました。私が現在大学で学んでいる経済学的な視点からではまず思いつかない発想だと思うのでとても興味深かったです。私も後世に漆を継承していくため

に自分にはこういった活動ができるのかを今一度考え行動していきたいです。(石橋希実)

雨予報が出ていたので心配しましたが、植樹の時間帯は雨も降らず、無事植樹することができました。今年もたくさんの方にご参加いただき、里山環境に興味のある方、漆の研究にご協力いただいている方々、金継ぎを学ぶ外国の方々や、NPO 会員や社員の皆様、また、当法人相談役でもある、重要無形文化財保持者（木工）の村山明先生にも植樹をしていただきました。ご協力ありがとうございました！



植樹の様子



恒例の記念撮影！

漆苗植樹祭 2024 ―平野 H 植栽地―

今年も平野地域の植栽地で、合計 26 本のウルシ苗木を植栽していただきました。2019 年より、参加者の皆様に、ご自分で植えた苗木に名前をつけていただいています。今年も、皆さん思い思いの名前を付けておられました。今後、生育管理とともに、定期的に成長の記録も行っていきます。最近の雪の中の様子です～

村山先生



「MIDORI-CHAN」



「園部の革命児」



「まおまお」



「青木の木」



まだ雪の多い時期が続きます



雪に埋もれながら、小さい苗も頑張ってます！

昼食は鳥名子様 特別メニュー「鶏そば」と「鶏そぼろおにぎり」の提供をご協力いただきました！

ここ数年うるかむまつりで植樹していただいている植栽地は広々としていてベンチもあるため、実はお昼ご飯に最適な場所でもありました。この植栽地を見学していただいたことがきっかけで、鳥名様に昼食提供のご協力をいただくことができました！

相談役 岡本氏の京地鶏を 100%使用した、こだわりの鶏そばと鶏そぼろおにぎりは絶品と評判でした！鳥名様、お忙しい中のご協力、ほんとうにありがとうございました！！



今回初めての取り組みで至らない点多々ありましたが、鳥名様の美味しいメニューのおかげで好評いただいたので、イベント内の限られた時間ではありますが、今後も、福知山・夜久野にお越しいただいたこの機会に、地域の特産なども少し紹介できればと思います。よろしくお願いいたします！



漆マップが完成しました！

2022年度の学生プロジェクトで取り組んでいただいた、上夜久野周辺の漆関連マップが完成いたしました！！

上夜久野地域の半野生ウルシの調査から、散策しながらウルシを見つけることのできるマップを計画していただき、何度も相談、修正しながら作成を進めていただいていた。卒業された後も忙しい中作成を続けていただき、ありがとうございました！

上夜久野駅近辺のお店情報が掲載されており、散策マップとして利用していただけます。今後、近隣施設に配布するとともに、様々なイベントでも活用していく予定です。



外面）両端を内側に折るとウルシの特徴がわかるようになっています

内面）ウルシの位置と、近隣の施設やお食事処も紹介しています

文化庁保存団体認定書交付式

先月号でご報告しました、選定保存技術の保存団体として10月に認定を受け、認定書交付式が12月に行われました。

改めて今回の認定を受け、身の引き締まる思いです。今後も漆生産と後継者育成の活動を継続するため一層の努力をしていく所存です。

今後とも、ご協力のほど何卒お願い申し上げます。

また、認定に伴い事業が拡大されたため、今年度は植栽地整備や記録作成の事業を追加進めています。



今年度の新しい動き



生物多様性に配慮した植栽

広葉樹の伐採後地に苗木を定植し、苗木の生育状況調査を行うことで、里山的山林の地形、広葉樹林伐採地の植生及び土壌等の環境がウルシ苗木の育成に与える影響や、漆園地造成に必要な情報の収集及び実証を行うことにしています。

なお、造成予定地域は希少なチョウなどの生物種の生息地でもあり、周辺地域の生物多様性の保全に配慮した植栽を検討しています。

地中の根の様子を調査

近年の会報の中でも少しご報告していますが、植栽地の中には風倒被害の事例が出てきています。その原因を探るため、福知山公立大学 情報学部 池野英利先生をはじめとする研究グループの方々にご協力いただき、地中レーダ装置により、ウルシの根がどのような状態なのかを探る調査を始めています。



写真：うえるかむまつり2024で
植えられたウルシ苗



NPO 法人丹波漆は、年間 100 本の植栽と、漆掻きの後継者の育成を目標に活動しています。

その運営には、皆さまのご支援・ご協力がなければ成り立ちません。

みなさまのあたたかいご支援をお待ちしています。

賛助会員（団体）…30,000 円

賛助会員（個人）…10,000 円

サポーター会員… 3,000 円（各一口）

お振込み先：

ゆうちょ銀行 振込専用口座 00920-0-209552

ゆうちょ口座間 記号 14430 番号 3724651

他金融機関から 店名 四四八（ヨンヨンハチ） 店番 448

種目 普通預金 番号 0372465

トクヒ）タンバウルシ

※ HP からも、クレジット払いで入金していただけるようになりました！

NPO 法人丹波漆 HP : tanbaurushi.org

会報たんばうるし 会報第25号 新年号

発行 NPO 法人丹波漆

〒629-1321

福知山市夜久野町直見 2452

tel: 090-8972-5062 (高橋)

fax: 0773-38-0425(事務局)

e-mail: info@tanbaurushi.org

編集担当 小野田さやか



2025.1.10

※事務所の住所が変更になっています！